
ある少年の異世界の日々

涼宮 真紅郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある少年の異世界の日々

【Nコード】

N7742K

【作者名】

涼宮 真紅郎

【あらすじ】

まず、はじめに、この作品は主人公最強系です。

チートです。主人公最強系が苦手な方は読むのを控えて下さい。

ハーレム系でもあります・・・たぶん。

もうひとつ、作者は文章表現が苦手です。

それでも、良い方だけ、お読みください。

注意：この作品は不定期更新です・・・。

零番目〜プロローグ〜（前書き）

はじめました。

とっても残念な感じです・・・。

それでもいいかただけ進んでください・・・。

主人公がどこでどうなったかは・・・突っ込まないでくれるとうれしいです

零番目〜プロローグ〜

おk、情報を整理しよう。

俺の名前は齋藤真どこにでもいる高校一年生だ。さいとうまこと

普通じゃないのは俺がオタクだってことだ。

そんでさ、信じられないとおもうけど

今、俺の目の前に金髪の美少女がいるよ、土下座して・・・。

「ごめんなさい！私のミスであなただが死んじやいました！」

だってさ♪

なんでこうなつたか説明すると・・・。

「いえ〜い！今日は撮つてたアニメを見まくるぜ〜！」

某白い幼女シスターが出るのとか、電撃ビリビリ少女が活躍するアニメとか♪

全部同じ小説のアニメだとは突っ込まないでよ♪

レッツマイハーウ・・・。

そこで俺の視界が暗くなつた。

「うう〜ん・・・。ここは・・・。」

気がつくとなんか、某ネコ型耳なしロボットのポケットの中の空間にいました♪

「つて、ここどこじゃああー・・・って言ってもしやらないか。」

え、そこ叫ばねえ？つて思った人、気にしたら負けだよ？

「おーい、ここはどこですかー。」

つて、誰もいねーか。

「あのー」

「ん？」

よっしゃ誰かいた！つてこんなところに人？ま、いつか♪

後ろを向くとそこには・・・

「・・・・・・・・。」

金髪美少女（美少女？）がいましたとさ。

「どうしました？」

・・・グフツ！首をかしげるそのしぐさに僕の心はブレイク寸前・・・。

「落ち着け・・・俺はロリコンでは・・・。」

「あの、大丈夫ですか？」

俺の顔を覗き込む美少女・・・。

「YESロリータ、NOタッチ！！！！」

「ふえ？なんですか？」

はっ！暴走したぜ！

「そういえば君誰？」

「あ、すいません。私デューっていいいます。神様です。」

「・・・・・・・・紙様？」

「え、君紙じゃないよね？」

「神ですよ？」

「紙なの？」

「はい。」

「君って、ペラペラじゃないよね？三次元だよね？」

「！紙じゃないです！ペーパーじゃなくゴットです！」

あ、なる。

「ok。納得しよう。」

「あれ、突っ込まないんですか？」

「ん。俺ってあんまそう言うの気にしねえんだ。」

「そですか。」

「んで、神様（自称）がなんでここに？」

「なんか、失礼なこと考えませんでした？」

「そんなバカなw」

「むゝ、本当ですか？」

やべ！ほっぺふくらまして・・・超かわいい・・・。
落ちつけ俺・・・。

「んで！神様（自称）がなんの用！」

「あ・・・それが・・・その・・・。」

「どつたの？」

「怒りませんか？」

「ん？怒る？なんで？」

「大丈夫だ・・・たぶん・・・。」

「たぶんって・・・しかし、仕方ないですよ、怒られても・・・。」

「

「なんでだ？」

「よし、いいいます、あなたは死んでしまいました。」

「は？なぜ？WHAT？」

「私の・・・ミスです・・・。」

「えっ・・・。」

「ごめんなさい！私のミスであなたが死んじゃいました！」

ここで、冒頭に戻るわけだ、

はてさて、この先どうなる事やら・・・。

零番目〜プロローグ〜（後書き）

真「うーっす、齋藤真だ。」

作「・・・どうも。・・・作者です。」

真「どうした？テンション低いな？」

作「いいんだ、どうせ僕は・・・。」

真「あー、はいはい、そうね。」

作「僕なんて、僕なんて・・・（ぶつぶつ）」

真「ありや、ネガティブモード入っちゃったか、まあ、いいや。」

作「・・・（ぶつぶつ）」

真「次回予告しますわ、次回、俺が異世界に飛ばされてチートの美少年となる、

そこで会う赤髪の美少女、彼女はいつたい？次回赤髪ってシャ。じやね？

乞うご期待。」

作「期待しないでください・・・。どうせ僕なんて・・・。」

真「あー、まあ、それでは！」

作「この・・・ロリコン（ボソ）」

真「なんだと、こら！ー！！」

デ「・・・あれ？私の出番は？」

作「忘れてた・・・。」

デ「・・・はい？」

壱番目く赤髪ってシャ○じゃね？ってかシャ○じゃんー」

「んてさ」

「・・・はい。」

「なんのミスで俺、死んだの？」

「ここが聞きたかった！」

「んと、私には人の寿命を操るノートがあるんですよ。」

「デ○ノートみたいな感じだな・・・。」

「はい、それで、コーヒークぼしちゃって・・・。」

W H A T ? コーヒークコーフィー?・・・てことは

「コーヒークに殺されたのか俺は！」

ビックリだ！コーヒークに俺が！

「・・・シヨックだー・・・。」

「あの、大丈夫ですか？」

しばらくお待ちください――

「おk、納得しよう・・・。」

「あ、すいません」

いいもん、コーヒークが地上最強ってことで納得するもん。

「それですね、あなたには異世界に行ってもらいます。」

「なんで？元の世界は？」

「それは無理です、あなたは死んでから一週間以上元の世界の時間では経過しています」

「まじで！おわた・・・。」

ああ・・・俺のアニメたち・・・。

「・・・どんな所に行くの？」

「魔法がある世界ですね、簡単に言つと。」

魔法？マジック？ホ○ミ？

「魔物いたりとかは？」

「いますね、すっすごいのも。」

「まじ？死ぬる自信あるわ・・・。」

「おわった、俺喧嘩よえーもん・・・。」

「大丈夫です！私が能力を改造しますから！」

「どんな感じに？」

「世界最強、いわゆるチートってやつですね。」

「oh、リアリィ？」

「まじで？」

「まじです、それに能力を三つあげます。」

「三つ？」

「はい、一つは考えた技などが自由に使える能力です。」

「考えた・・・。それって漫画の技も？」

「はい、何でも無限に使えます。」

「まじで！？それって忍者漫画の影分身でフルボッコも夢じゃない！」

「二つ目、絶対防御です。」

「絶対防御？」

「砂の寝不足忍者の技？」

「皮膚に見えないバリアを張ってどんな攻撃も防ぎます。」

「まじで！？」

「やば！無敵じゃん！」

「三つ目、身体能力無限強化です。」

「身体能力無限強化？」

「どうゆうこっちゃ？」

「どんな体術、武器の扱い、身体能力、すべて無限に強くなれます。」

「

やっぱ！すげ！ホント無敵！」

「あ、後、魔法も無限に使えるし威力も自由自在です。」

「・・・チートだ・・・。」

「やべー、さいこーだわ・・・。」

「よろしいですか？」

「おk！バチコイ！！！」

いつでも良いぜ！キャモン！

「よし！・・・えい！」

え、そんな簡単なの？

あ、俺の足元が・・・穴に。

「ううわああー！！！」

「がんばってくださいーい♪」

あの、幼女神（自称）め！今度会ったら頭なでまわしてくれる！
そこで、俺の意識は途絶えた。

「ナーーーウー！！！」

デイット風のイリユージョン！

・・・どこやねん、ここ、あたり一面森って・・・。

「迷ったら、右の法則！」

右に行こう♪右に行こう♪俺は元気♪歩くの大好き♪

どんどん行こう♪

——三十分後

「・・・グスツ。歩くのなんて嫌いだ・・・。」

迷った・・・完ぺきに・・・。

「どしよ・・・。」

考えろ！考えろ！考え・・・あ。

「能力あんじゃん。」

忘れてた・・・。

「よっしゃ！いっちょドラゴンの玉の舞○術で！」

おりゃ！

おおー！！！！飛べた飛べた！

「んゝどっかに町は・・・ん？」

あっちの方で火花が・・・。

「鷹の眼・・・。」

んゝ・・・あ！魔物が、クマ？

誰かが戦ってるっポイな。

「ちょうど良いか。助けよ、苦戦してるみたいだし。」
俺は戦闘が行われている場所に飛んで行った。

— side ???

「くっ！」

くそ！まさかここにグライサーがいるなんて！

「く、」 我に宿りし火の精よ！力を貸せ！^{ファイヤボール} 火の玉！！！」

「ギャルツ！！！」

グライサーの頭に命中！

「よし！やったか？」

私は期待した・・・が

「くっ！やっぱり駄目か！」

グライサーは起き上がって私に突進してきた。

私程度の魔力じゃ倒せない！

「いったん逃げるしか・・・って嘘！」

いつに間にか壁に追い詰められてた！

「やば！」

「グルラア！！！」

グライサーが腕を振りかぶる。

「くっ！」

もう駄目だ、そう思っただけで眼をつぶる。

だけど、いつまでたっても衝撃がこない。

私は恐る恐る眼を開けた、そこには

「ふゝ、間一髪って奴だね。」

銀髪の美少年がグライサーを抑えていた。

— side 真

ふー、何とかなったね。

この子フード被ってるけど女の子だね。

覚悟してたっばいけど間に合った。

「大丈夫？君？」

俺は声をかけた、すると

「へ？あ、うん、だい、じょうぶ。」

「そっか、良かった。」

女の子の声だし、

・・・それにしてもこのクマ、女の子に攻撃しようとして

お仕置きじゃ！

「雷撃！！！！」
らいげき

「グルア！！！！」

まずは雷でぶっ飛ばす！

「いくぜ！」
エクステンド 変身！！！！

根性主人公の小説の改造人間の変身フリーズ

このフリーズで俺の体を鎧が包む。

「つしゃ！」

完成した鎧は狼の形、よし！イメージ通り！

「いっくぜ！」

まずは、スピードで突っ込む！

そして、腹にキック、顔にパンチのコンボ。

「グルッ！」

怯むクマ。

「いっくで〜！オルタ！」

俺の前に黄色の輪が現れる。

「くらえー！！！！」

その輪に飛び込むと俺のスピードが瞬時に上がる！

その勢いでクマのドッテッ腹にキックをぶち込む！

「ギャルア！！！！」

クマはかなりの勢いでぶっ飛んで行った。

「おーわり。」

鎧をとる。

すると鎧は大気に消えた。

「ん、鎧つてより外骨格っぽいな・・・。」
まあ、いいか。

「終わったよ、君。」

そばにいた女の子に声をかける。

「あ、うん、ありがとう・・・。」

「どういたまして。」

ニコツと笑顔でね。

「／／／・・・うあ・・・。／／／／」

どったの？変な声出して？

「あ、自己紹介ね、俺サイトウマコト藤真よろしく。」

「サイトウ・マコト？サイトウって名前なの？」

「あ、逆逆、真が名前。」

「そっか、マコトか、私はアリーナ・ディセス。」

そう言つて女の子がフードをとった、そこには

「よろしく」

シャ○がいた。

あれ？ここつて違うよね？炎髪灼眼のツンデレ美少女の世界じゃないよね？

「・・・・・・。」

「？どうした、マコト。」

あ、似たような人だねうん。

「なんでもないよ、えっとディセスさん？」

「アリーナでもいいよ。」

「あ、わかったアリーナ。」

ん、見れば見るほど似てる・・・。

身長ちっちゃいし、気が強そうだし、

「アリーナはどう「なあ！マコト！」・・・何？」

被った・・・。

「グライザー倒すなんて・・・すごいな！」

グライザー？さっきのクマ？

「それがどうしたの？」

「グライザーはランクA以上の魔物なのに・・・。」
ランクA？よくわからないな。

この世界のこととかアリーナに聞いてみよ。

壱番目く赤髪ってシャ○じゃね？ってかシャ○じゃん！く（後書き）

真「おっす、真だ」ア「アリーナです」作「・・・ども。」真「今回もテンション低いなー。」作「アリーナの性格がまとまらない・・・。」ア「そりやそうよ、まとまてないもん」真「そんなこと言うなよ。」作「出来るだけ炎髪灼眼のツンデレっ子に近づけます。」ア「そうしたら？」真「お前、自分のことだろ？」ア「うるさい！うるさい！うるさい！」作「・・・してやったり（ニヤリ）」真「このやる！てめ！」作「・・・逃亡！」真「あ、てめ！待ちやがれ！」ア「二人とも行っちゃった・・・。馬鹿な奴真って・・・。（真の笑顔思い出し中）／／／／／・・・はっ！何考えてんのよ！私！」作「・・・真のこと（ボソ）」ア「！！！！この！死ね！二回死ね！！！」作「迷い猫・・・ふっ。」ア「この！」^{ファイヤボール}火の玉！！！」作「！！！！・・・卑劣な！！！」ア「死ね！！！」真「戻ってみればすごいことに・・・まあ、いいか次回予告、アリーナと森を抜けてついた先はものすごいでかい学校、そこで俺は学校に学園長の許可で入学することに、そこに現れる金髪お嬢様、次回く金髪お嬢様って碌な奴いねーよなくでお楽しみに。」

デ「あれ？私わ？」作「・・・また、忘れてた。」デ「またですか！私はほとんど出番ないんですよ！！！」作「・・・大丈夫。ここですから。」デ「本編にでないじゃないですか！！！！！」作「・・・いじりキャラだから。」デ「うわあああん！！！！！」作「・・・この子を末永く見守ってください。」

参番目ゝ金髪お嬢様って碌な奴いねーよなって思ってたのあれ訂正するわゝ（前

後書きが気に入らるので変えました。

参番目、金髪お嬢様って碌な奴いねーよなって思ってたのあれ訂正するわ

ふむ、大体のことをアリーナから聞いた。
情報を整理しよう。

・・・そこで話は？って思った人あんた負けたよ？

この国の名はゼリアントルグ。

五つの国でできている大陸らしい。

その五つの国の名は

一つ目、アリエルナ

アリーナ見たいな人が住んでいる国見たい。

二つ目、デルシアナ

獣人族って言う獣に近い人型の人たちが住んでいるみたい。

三つ目、タリフォード

エルフ？らしき人？が住んでいるって、ファンタジーだね。

四つ目、ガリندان

いわゆる魔族らしい、でも良い人？達が大勢いるってゲームとかと違うね。

五つ目、メリアナラ

種族のハーフ、獣人と人間だったり、エルフと魔族だったりのハーフの人たちが住んでいるらしい。

ちなみに俺がいるのは丁度五つの国の真ん中だそうだ。

この国は戦争ないんだって平和だね。

魔法の基本属性は六つ。

火、水、風、雷、氷、土

特殊なのは上位属性二つ。

光、闇らしい

今では使える人いないんだと。

お金の通貨はノアだそうだ。

ま、大体こんな感じかな。

そんでね、今こんなこと考えてる間にね、俺の目の前にね、バカでつかい学校が現れたんだよ。

「なあにこれえ？」

A・I・B・O になっちゃった・・・。

「どうした？マコト？」

「んにゃ、何でもね、でここは？」

「私が目指していた目的地、『魔法学校 アリアンドラ』だよ。すげー、ホグオーツ？ってな感じ。」

「あ、でも、ここって俺入っていいの？」

「大丈夫だよ、今は試験中だしね。」

「試験中？」

「入学者募集の方が分かりやすいかな？」
ふむ、受験？

「・・・オワt a！」

「ふえ？」

「筆記テスト出来ねえよ・・・。」

「ああ、大丈夫だよ、試験は実技だけだし。」

あ、そなの。

「行こう？マコト。」

「ああ。」

でさ、入口がバカすげーの。ホントにホグオーツじゃね？
しかも、周りの人たちが・・・

「・・・おい、あれって”炎帝”じゃないか？」

「あれがッ！？すげー、封印解きにきたのか。」

「隣の奴、誰？」

「・・・イケメンは死ぬべし！！！」

だつて♪

「・・・あのさ、アリーナ。」

「何？」

「封印って何？」

「あ、封印って言うのは強すぎる魔力を抑えてもらうの。」

「まじ？」

「うん、代々、基本属性神の血縁は魔力を封印してもらった。」

「へえ。」

ん？基本属性神？

「な「アリーナ！」・・・誰だよ・・・」

被った・・・。

「この声ってアジア！」

「やっぱり、アリーナね！」

誰だろーって後ろ向きます。

そこには

金髪ツインドリルの小霸王がいましたとさ♪

・・・orzなんで曹操が・・・。

「ひさしぶりね、アリーナ。」

「うん、アジアも。」

「ところで隣のあなたは？」

ん？俺？

「俺はマコト・サイトウ。」

「そう、私はアジア。アジア・テルゾン、よろしく」

とアジアは手を差し伸べてくる。

「こちらこそ。」

「で、二人はどうゆう関係？」

「助けた関係。」

「？どゆこと？」

「実は・・・。」

「へえ、あのグライザーおね。」
「うん。」
「（それで、どうなの？）」「
「・・・？どうって？」
「（惚れたの？）」「
「！！・・・（そんなわけない！）」「
「（あやしいわね。）」「
「（なんにもないわよ！）」「
なんか二人して話してるけど聞こえね、所で
「なあ、二人とも。」
「「ひゃう！」」「
「？どつた。」
「「な、なんでも！」」「
？まあ、いいか。
「試験は？」
「あ、忘れてた！」
「ばかね、アリーナは。」
「む、アジアは？」
「もちろん合格よ。」
「ほんと！私も頑張る！」
「ええ、待ってるわ、じゃね、先に入学式場で待ってるわ。」
そう言つてアジアは去つて行つた。
さて、どうなるのか。
俺にはわかつかりつません」

参番目く金髪お嬢様って碌な奴いねーよなって思ってたのあれ訂正するわ(後

真「はい！どうも！真です。」

ア「アリーナです。」

作「・・・作者です・・・。」

真「今回もテンション低！」

ア「まあ、いいんじゃないかな？」

作「・・・そうそう、イインダヨー。」

真「それもそつか。」

作「・・・でさ」

真&ア「ん？」

作「・・・勢いで出しちゃった、小霸王・・・。」

真「あれってさ、元ネタって・・・。」

作「・・・うん、恋〇無双・・・。」

ア「？何それ？」

真「アリーナは知らなくていいものだ・・・。」

ア「？」真「まあ、いいか、次回予告だ。次回俺とアリーナは入学試験を受ける、そこで明かされるアリーナの真の実力。そして現れる基本属性神の血縁者達。次回、く氷って言ったらクーデレ？くお楽しみに。」

ア「氷帝ってなが「作者ブロック！！！」作者が今までにない動きを！」

真「あはは・・・。では、さいならー。」

デ「私の一人コーナー・・・。」（パフパフ！）
作「・・・アシスタントの作者。」
デ「このコーナーは特に何もしません。」
作「・・・色々な募集するだけ・・・。」

デ「さつそく、募集します、こんな技を使ってほしいって技を募集します。」

作「・・・それと、デューのこんな性格で話しているのを聞きたいって言う

のも募集します、例えば・・・。」

デュー、妹Ver デ「ごめんなさい、お兄ちゃん・・・。デューの間違いでお兄ちゃんが死んじゃったの・・・。」

デ「ちよつと！！！！！」

作「・・・募集します・・・。」

デ「私！絶対しませんからね！！！」

作「・・・作者の力は世界を動かす強制力がある。」

デ「ってことは・・・。」

作「・・・反抗しても無駄w」

デ「うわああーーーーーん！！！！」

作「・・・ってことで技とデュー、募集します。」

デ「ううう・・・。感想も募集します・・・。」

作「・・・自分で考えたオリ技でも可・・・。」

デ「あんまり変なのはやめて下さいね？」（うるうる）

作「・・・卑劣な！」（ぶしゃーーー！）

デ「え！？作者さん！？何で鼻血が！？って止まんない！？鼻血が

！作者さんの鼻血がとまりません！！！」

作「・・・死してなを一遍の悔いなし！」（ぐっ！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7742k/>

ある少年の異世界の日々

2010年10月9日18時19分発行